後　記

薬師寺泰蔵先生には二〇一〇年三月をもって、本塾大学法学部を定年によってご退職となる。先生は一九九一年に埼玉大学大学院政策科学研究科から本塾大学法学部に転じられた。政治学科の国際政治部門のなかで、国際政治理論の担当者がそれまで不在であり、このため国際政治部門をあげてお願いして、先生にご赴任頂いた次第であった。先生が始められた国際政治理論の講義は大変刺激に満ち、大盛況であったことは今も語り種である。また若い学部学生と接することを先生は心から楽しんでおられた。

もとより私見であるが、先生は現実から離れたところで理論を構築するような取り組みを必ずしも好まれず、むしろ理論の視角から国際政治の様々な現実を解析し総合する姿勢を堅持されていたように思う。そうした学問のスタイルは政治学科の国際政治研究に大きな足跡を残した。さらに薬師寺先生のゼミナールは一九九〇年代、優秀で個性的な塾生が数多く集い、活発な研究活動が展開された。研究者の道に進んだ人々がその後、逞しく成長していることは、本号の若手執筆者に明らかであろう。

退職記念号については編集委員会に対して、ご退職なさる先生が属する部門の教員が一人、連絡係を担当するのが慣わしである。この記念号では当初、山本信人教授がその任を担当していたが、同君の在外研究にともない、私が仕事を引き継いだ関係で携わることとなった。無事刊行の運びとなり安堵している。

薬師寺先生は、一九九七年から学事担当常任理事として鳥居塾長のもとで塾の学校行政に、また二〇〇三年からは内閣府総合科学技術会議常勤議員として政府に入られ、力を尽くされた。そのご業績も甚大なものがある。

法学部政治学科が一九九八年に開設百年を迎えたこともすでに往事となった。その前後、私は山田辰雄学部長のもとで、各種行事の調整と実行をお手伝いする役回りとなった。当然のこととはいえ初めてのことばかりで、管理部門との調整などあれこれ紛糾したが、塾監局から薬師寺先生に一貫して支えていただいたことには、いまだに感謝の念に堪えないものがある。

薬師寺先生の学問的生活のさらに豊かなることを希望し、将来にわたるご健康と一層のご活躍を心よりお祈りしたい。

二〇一〇年一月

法学部教授　赤木完爾